

2001・4・17 沖縄タイムス

# 論 壇

「地域性と国際性、普遍性を未来へ」を柱に一九九四年の沖縄県議会は二〇〇一年の開館に向けて「沖縄県立現代美術館」（仮称）を建設すること議決した。

戦後いち早くスタートとした「沖展」や、「県展」、「各団体展」、「琉石美術賞展」さらに「美術家たちの活発な活動」、「画

廊の活動」が県民の生活に定着していくなかで、本格的な「美術館」の必要性が叫ばれた。その背景には、近代社会における大切な文化施設として、歴史や教育的立場から、一日も早い県立美術館の建設を待ち望む「県



上原 誠勇

「沖展」会場や美術展

などで、熱心な署名運動が繰り広げられたことは記憶に新しい。国内でも沖縄県だけが公立美術館

術館建設決定のニュースは、県民をはじめ、県外から訪れる観光客や美術愛好者から大きな期待が寄せられた。

天久の新都心に県立美術館と県立博物館を併設し、二十一世紀の沖縄の文化の中心地として位置付け、広々とし

天久の新都心に県立美術館と県立博物館を併設し、二十一世紀の沖縄の文化の中心地として位置付け、広々とし

さらに、六千万円を注ぎ込んで東町会館に移動した「県民アートギャラリー」も、年間わずか二百万円の運営費しか充てず「死に体化」した施設になっている。明らかに県の美術文化行政は手薄であり、行政サイドの美術文化に対する理解と認識の甘さを露呈した状況だ。

## 県立美術館の経緯説明を

た都市公園に両館を据える計画が立てられた。九四年には美術館の基本構想が決まり、九五

が中止され建設計画はとん挫した。

「県立美術館」は美術を介して県民の精神史を知る重要な館であり、内外文化の交流と発信の場でもある。現県政の「建設中止」とその説明の無さは、美術文化を軽視したに等しく、「行政の怠慢」と言わざるを得ない。

果たして、県立美術館の建設計画はどこへ行つたのだろうか。県当局は「中止された県立美術館」「県民ギャラリー」など美術文化行政への取り組みの現状を、県民に明らかにすべきではないか。

計画の通りに進めば、九六年には実施設計が完了し、九七年から建設が始まり二〇〇一年には県民の長年の願望「沖縄県立現代美術館」が天久

新都心に開館するはずであった。

しかし、県政が大田知事から稲嶺知事へ変わると、美術館と博物館の総予算二百億円の予算ねん工芸の盛んな場であることはいまも変わらない。